【研究内容　児童会活動】

多様な他者との関わりをつなげ，自己有用感を高め合う児童会活動

青森県野辺地町立野辺地小学校
教諭　渡辺隼人

１　主題設定の理由

令和元年度末から今日に至るまで，コロナ禍という未曾有の事態に直面する中，学校における教育活動はあらゆる場面において『関わる』ことを制限されてきている。このことは，「学年，学級を超えて全ての児童から構成される集団での活動であり，異年齢の児童同士で協力したり，よりよく交流したり，協同して目標を実現したりしようとする活動」[1]である児童会活動を，著しく困難なものとしているであろうことは，想像に難くない。

しかし，そのような状況においても，現場の先生方は「協力できる場をもたせたい」「交流させたい」「協同して目標を実現させたい」といった思いをもち，児童会活動の指導にあたっている。制限のある状況の中においても，児童会活動の目標達成にむけて，「何とか関わりをもたせる」こと，「何とか活躍の場をもたせる」ことを意識して取り組んでいる。活動が制限された状況でも，一つの関わりが新たな関わりをつくり，広がっていく関わりの中で活躍する場を設定することで自己有用感を高めることができるのではないだろうかと考え，主題を「多様な他者との関わりをつなげ，自己有用感を高め合う児童会活動」と設定した。

本実践は，主に令和２年度の実践である。

２　実践の概要

①　学校の概要について

本校は，陸奥湾の最奥部，下北半島の付け根に位置している野辺地町の中央に位置している。町の人口はおよそ１万３０００人ほどで，町内に３校あるうちの小学校の１つである。児童数は２２５人（令和２年４月時点）で，１学年と２学年が２学級で，３～６学年は単学級という学校規模である。

本校の児童会には，全児童が所属しているが，「企画」「生活」「保健」「体育」「給食」「図書」「放送」の７つの児童委員会には５年生と６年生が所属している。また，各学級の代表と各児童委員会の代表からなる代表委員会があり，必要に応じて組織・招集される。児童会行事は，「１年生を迎える会」「前期児童会総会」「後期児童会総会」「６年生を送る会」の４つが計画されている。

②　１年生を迎える会

年度当初の計画では，４月３０日に行われる予定だった１年生を迎える会だが，２度目の休校要請のために予定通り行うことができなくなった。通常であれば，６年生が主体となって内容を計画・運営し，全校児童が１年生とふれあう行事である。６年生にとってはリーダーとしての自覚をさらに高める機会となるし，１～５年生にとっては新たな仲間とのふれあいの場になるはずであった。

休校明け（連休明け）の実施に変更した場合，「迎える新鮮さが薄れること」「休校期間の学習の遅れを取り戻すため，迎える会の準備に時間をとりにくくなること」「全校児童が一堂に会することがより一層難しい状況に置かれること」が懸念された。中止も検討されたが，子供たちの活躍とふれあいの場を何とか確保したいという思いから，「休校になる前」に「できそうなこと」を「限られた学年」で行うという方針に変更し，実施することにした。

---

[1] 小学校学習指導要領解説特別活動編 p.84

休校前日，体育館に１年生，２年生，６年生のみが集まり，１年生を迎える会を行った。６年生からは，「迎える言葉」「よさこい演舞」を１年生に贈った。よさこいは毎年５・６年生が運動会で披露しているものだったので，６年生にとってはすぐに披露できるものではあったが，「よりよいものを１年生に見せたい」という思いから，休校前の貴重な時間を使って事前練習を行い，本番に臨んでいた。６年生が動きを揃えてよさこいを踊る様子を，１年生は食い入るように見ていた。また，２年生からは，生活科で栽培したアサガオの種を１年生にプレゼントした。こちらは例年通りに準備できていたため，２年生は渡すことができて安心していたし，１年生はプレゼントをもらって嬉しそうにしていた。

急な変更となり，子供たちが主体的に活躍する場はほとんどなかったものの，１年生とのふれあいを通して，上級生としての自覚の高まりや，他学年との関わりが生まれたものとなった。

③　前期児童会総会

休校期間が明け，学校が再開した５月。通常であれば連休明けすぐに児童会総会を行っていた。しかし，「休校期間のため準備が十分にできなかったこと」「異学年が一堂に会し，過密になること」「学習の遅れを取り戻すための時間を確保する必要があること」などの課題が生じた。中止することもできたが，６年生（委員長）としての活躍の場を確保することや，新たに委員会に所属する５年生の意欲を喚起することをねらい，形式を変更して行うことにした。

変更点の一つ目は，各委員会の活動計画の説明のみとし，質疑応答を省略したことである。休校前の委員会活動で，ある程度活動計画はでき上がっていたので，質疑応答を省略することで準備にかかる時間を省き，当日も短時間で行うことができた。これにより，最低限の委員長の活躍の場を保障することができた。

変更点の二つ目は，参加する学年を減らしたことである。通常であれば，児童会総会には４年生以上の児童が参加することになっていたが，５・６年生のみが参加して行った。人数を減らすことで過密を避けつつ，時間短縮にもつなげることができた。５年生にとっては，自分が所属する委員会の代表が発表を行う場ということで，程よい緊張感と今後の活動への期待をもつことができた。

変更点の三つ目は，業間活動の時間に行ったことである。感染予防対策として短時間で行わなければならないこともあり，学級裁量の業間活動の時間を当てた。授業時間を確保しつつ委員会活動への意欲喚起を図ることにつながった。

④　常時活動

【企画委員会】

企画委員会の主な活動は，全校集会・児童集会での司会，ミニレク集会の企画・運営である。

休校明けには，全校児童が体育館に集まることが忌避されたため，集会活動が校内放送（音声）で行われる放送集会に変更された。変更当初は児童によるアナウンスも行われなかったため，企画委員会としての活動がな

くなってしまった。７月からは体育館に集まることができるようになったため，司会活動を再開することができた。

ミニレク集会は，異学年交流を図る目的で，年に２回ほど実施している。もともと参加する学年を２学年ずつに制限していたため，マスク着用や換気等の対策をとって行うことができた。じゃんけん列車，だるまさんが転んだ，ドッジボールなどを行い，楽しみながら異学年と触れ合うことができる場となった。企画委員会にとっても準備や進行などで活躍することができた。

【体育委員会】

本校では，冬場の体力づくりのために縄跳びに取り組ませている。例年，体育委員会では集会時に縄跳び発表を行い，児童の意欲喚起を図っていた。令和２年度は新しい活動として，「なわとび大会」を企画・実施した。低学年，中学年，高学年に分けて大会の日を設定し，低学年は「縄跳びリレー」，中・高学年は「長縄跳び」を行った。

「縄跳びリレー」は，スタート地点で前回し跳びを１０回してからスタートし，コーンを回って戻ってバトンタッチというルールで行った。誰もが楽しめるように，途中で引っかかっても１０回跳んだらスタートできるというルールを設定していた。得意不得意に関わらず，誰もが楽しめるようにルールが工夫されていた。

「長縄跳び」では，「８の字跳び」，「何人が長縄に入れるか挑戦」，「長縄跳びじゃんけん」など，チームで競ったり記録に挑戦したりしていた。

「縄跳びリレー」にしても，「長縄跳び」にしても，どちらもチームで楽しめる活動を設定していたため，異学年で力を合わせることで，関わりを深めることができた。

【保健委員会】

保健委員会は，全校児童が集まらなくても発表ができるように，委員会発表の形を工夫した。「あいうべ体操」という舌の体操について発表を行ったが，放送集会が主だった時期での発表だったため，放送するグループと各学級で放送に合わせて実演するグループに分かれて発表を行った。放送を担当するグループは，話す内容を分担しながら「あいうべ体操」の仕方を放送し，実演するグループは，放送内容に合わせて「あいうべ体操」を各学級でやって見せた。感染リスクの低減を図りつつ，発表を通して達成感をもたせたり，関わりを深めたりすることができた。

【給食委員会】

給食委員会は，低学年に紙箱作りを教える活動を取り入れた。紙箱は，給食の際に出るストローなどのゴミを集めるために給食委員会が作って低学年に配っていたが，低学年の各教室に給食委員が出向き，作り方を教えて一緒に作った。教えてもらった低学年は折り紙感覚で楽しみながら作ることができ，教えてくれた給食委員に感謝の気持ちを持つことができた。給食委員会にとっても，達成感をもつことができ，低学年との関わりを深めることができた活動となった。

⑤　６年生を送る会

６年生を送る会は，５年生が計画・準備・進行を担当している。６年生に全校児童みんなが感謝の気持ちを表せるようにするため，時間をかけて話し合って計画・準備を行った。

５年生が考えて新しく取り入れた活動が，「感謝のメッセージ作り」である。本校では，縦割り班での活動があるため，６年生以外の児童が縦割り班で集まり，それぞれの班の５年生が１～４年生に，「メッセージ作り」をお願いし，作成の仕方を教えた。自分が所属する縦割り班の６年生に向けてメッセージを書かせていた。さらに，折り鶴の飾りにそのメッセージを添えるようにし，折り鶴とメッセージを送る会当日に６年生に送るという計画である。初めての活動であったが，５年生が綿密に準備をしたおかげで，限られた時間でメッセージ作りを終わらせることができた。

送る会の当日は，「猛獣狩り」というグループを作るゲームを行った。５年生が掛け声をかけたり，大袈裟に振りをつけて見本を示してくれたりしたおかげで，みんなが楽しそうにゲームに参加することができた。グループを見つけられない子を５年生がサポートして，グループを探してあげたり，自分たちのグループに誘ったりと，困っている子を助けながらみんなが楽しめるように働きかけていた。

会の終わりには，用意していたメッセージと折り鶴の飾りを６年生に渡した。６年生からはお礼の言葉と運動会で使用する応援団旗を贈ってもらった。６年生も最後に学校のためにできることをしたいと，家庭科の時間を利用して製作した。６年生の家庭科を受け持っていた５年担任（児童会担当でもあった）の協力・支援のおかげで，みんなの思い出に残る送る会となった。

３　成果と課題

コロナ禍という制限の中，できる範囲ではあったが児童会活動を止めないように行うことができた。制限があったために生まれた工夫もあり，ともすればマンネリ化してしまいがちな児童会活動に変化をつけ，最小限でも，関わりを意識した取り組みの工夫が見られたことは，一つの成果と言えるだろう。一つの委員会が新しい活動に取り組むと，刺激を受けた他の委員会が新しい活動を計画するという広がりも生まれた。新しい活動に達成感をもった５年生の中には，「６年生になったときにも新しい活動に取り組みたい」という意欲をもつ子も多く，次年度の活動につながりをもたせることができた。

幸いにも，新型コロナウィルスの感染状況が悪化していなかったため，通常に近い形で児童会活動を行うことが多くの場面でできた。しかし，地域の感染状況によっては，活動そのものがストップしてしまうということが考えられる。リモートでの集会活動や委員会発表など，ICT を活用していくことで，活動停止を最小限に抑えることができると考えている。GIGA スクール構想の推進により，ICT を活用する環境は整ってきたため，日頃の児童会活動の中でも ICT を活用していき，不測の事態が起きたときに児童も教師も対応できるようにすることが，今後の課題と言える。

コロナ禍の出口はなかなか見えない状況ではあるが，さまざまな工夫や教師の適切な助言を通して児童の関わりや活躍の場を保障し，児童の自己有用感をより一層高められるよう，今後も取り組んでいきたい。